

## 特色ある共同利用・共同研究拠点 期末評価結果

大学名	法政大学	研究分野	人文学（芸術学・芸術一般）
拠点名	能楽の国際・学際的研究拠点		
学長名	田中 優子		
拠点代表者	山中 玲子		

### 1. 拠点の概要 ※期末評価報告書より転記

#### [拠点の目的]

本共同利用・共同研究拠点は、能楽研究所に長年にわたり蓄積されてきた豊富な能楽研究資料や人的なネットワーク等の研究資源を、国内外に開かれた共同研究によってより広汎・有効に活用し、その研究成果を効果的に社会に還元するとともに、能楽という従来きわめて日本的と見なされてきた領域を真に国際化することを目的とする。

能楽研究所は創立以来60年間にわたり、研究の基礎となる能楽資料の収集と整備・公開に努め、重要文化財指定の室町期謡本や世阿弥伝書等を含む、約4万点の蔵書群を構築するとともに、大学の枠にとらわれず国内外の大学院生・若手研究者を受け入れ、研究の機会を提供してきた。本研究拠点を拠点とした研究者のネットワークを基盤とし、平成14年、能楽に関する初の総合学会である能楽学会（平成24年1月31日現在会員数454名）が設立されている。

本拠点は、能楽研究所の如上の特性を最大限に活用し、国内外の研究者との共同研究によって、**1) 豊富な文献資料に基づく実証研究の深化と社会への還元、2) 総合芸術たる能楽に対応した多様な視点による新たな研究の創造、3) 国際共同研究による方法論の共有と成果の発信**をめざして、共同研究拠点を形成・運営していく。能楽という従来きわめて日本的と見なされてきた領域、日本が研究の中心となってきた分野を真に国際化することは、日本の人文科学の国際的地位を高めることにもつながると考えている。

#### [拠点における成果及び目的の達成状況]

1) 能楽研究所が所蔵する豊富な能楽資料を広く公開し、国内外の研究への利用を促進するため、貴重資料のデジタルアーカイブ化を強力に推進し、「能楽資料デジタルアーカイブ」に、光悦謡本（上製本）・永正十八年信光伝書・柳洞本・和泉流明和中根本など、26点（100冊揃い謡本も1点と数える）の貴重資料を新たにアップした。これに加えて能楽の最古の家系である金春家に伝わった資料群に特化した「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」（資料件数1805点）、仙台藩伊達家旧蔵の能楽資料群に特化した「伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ」（資料件数165点、100冊揃い謡本も1点と数える）を新たに立ち上げ、従来はアクセスが難しかった上記の資料群の活用が格段に容易になった。さらに、能楽の映像として最古の部類に属する昭和初期の能楽フィルム95点もデジタル化した上で、新たに「昭和初期能楽映像アーカイブ」として公開した。その中には、昭和10年に満洲大連でおこなわれた大連能楽堂の舞台開き公演の映像のような貴重な初公開資料も含まれる。各デジタルアーカイブのアクセス数は「能楽資料デジタルアーカイブ」が48824（平成19年度からの累計）、「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」が28670（平成26年の公開以来の累計）、「昭和初期能楽映像アーカイブ」が3693（平成25年の公開以来の累計）である。「伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ」は平成30年度末の公開を予定している。一方、デジタルアーカイブの拡充と並行して、能楽研究所所蔵資料の解題目録を整備し、平成26年に『鴻山文庫蔵能楽資料解題（下）』を刊行した。同書は能楽研究所が管理する能楽関係資料のうち、史上最大の文庫「鴻山文庫」の資料全点に詳細な解題を付した目録であり、（下）巻には2278点の資料が収録されている。同書によって、「鴻山文庫」の全容がはじめて明らかとなり、研究者の全面的な利用が可能となったことは、すこぶる大きな成果と言える。

上記の能楽資料を活用した実証研究として、①能楽資料に関する国語学的研究、②近代能楽史に関する総合的研究、③光悦謡本の学際的研究などがおこなわれた。

①は、能楽・音曲伝書の語彙や音韻学関係の記述を国語学的観点から検討した豊島正之を中心とするプロジェクト、能の謡の音韻伝承をもとに日本語音韻史の解明を目指す坂本清恵を代表者とする公募型共同研究、能楽の語りや狂言の口調に基づき近世の語り口調の復元を試みた小林千草の実験的研究があり、成果は研究集会・学会での発表や論文によって公開された。②では、近代メディアと能楽、植民地における能楽受容、能楽と軍国主義等、従来あまり本格的に取り組みこなかったテーマを取り上げ、「近代日本と能楽」と題する全6回の連続セミナーを実施し、成果を社会に還元した（参加者324名）。各回、関連資料のミニ展示も開催した。③では、能楽研究に加え書誌学・印刷史・日本文学の専門家を招き、2年間にわたって光悦謡本に関する学際的共同研究をおこなった。その最終的な研究成果として、「縦断横断 光悦謡本一慶長文化の精華を解析する」と題する研究集会（参加者80名）を開催した。合わせて特別展示「光悦謡本の世界」を企画し、光悦謡本とその関連資料を一堂に公開した（芳名録記載の入場者数170名）。また、武蔵野美術大学の古活字版謡本復元プロジェクトにも協力し、光悦謡本に関するすべての画像データを提供したほか、復元プロジェクトに向けた謡本の調査を共同でおこなった。その成果は武蔵野美術大学美術館で開催される能楽研究所との共催による展示「和語表記による和様刊本の源流」において公開されたが、同展には能楽研究所からも光悦謡本（上製本）の全100帖を全て出展した。これは研究所創立以来初めての試みでもある。

その他、平成27年度国立能楽堂企画展示「近世大名家の能楽」（入場者数9216名）、平成28年度国立能楽堂企画展「能絵の世界」（入場者数10819名）、平成29年度国立能楽堂企画展「能の作り物」（入場者数9270名）、平成30年度国立能楽堂開場35周年記念特別展「土佐山内家の能楽」（入場者数9549名）が、能楽研究所との協力という形でおこなわれ、能楽研究所から多数の資料を出展するとともに、展示に合わせた図録や講演会等を通じて、研究成果の社会還元にも積極的に取り組んでいる。

貴重資料の翻刻を「能楽資料叢書」として刊行し、研究者に広く提供する試みも継続して行った。平成26年度には『大蔵虎清 間・風流伝書』『金春安住集』『秋田城介型付』を、平成27年度には『御囃子日記』を刊行し、平成30年度中にも『近世諸藩能役者由緒書集成』を刊行予定である。その他、能楽研究のパイオニアである野上豊一郎の功績を再検証するシンポジウムなども開催したが、以上のシンポジウムや研究集会の成果の多くは、「能楽研究叢書」として刊行するとともに、電子版としてウェブ上でも広く公開している。

2) 総合芸術としての能楽を新たな視点で解明するため、①能役者とも協同して演出・技法の変遷についての研究や古演出の復元をおこなうとともに、②能舞台の研究、音響工学による謡の音声の研究、能の技芸伝承の分析等を、異分野の研究者との共同研究を通して推進した。また、③能楽が伝えてきた美意識や知恵をプロダクトデザイン、新しい芸術の創造、医療や健康に活かそうとする異分野融合研究も始まっている。

①江戸時代の京都で活躍した小鼓の名家「山崎家」に伝わる文書や手付（小鼓・大鼓の楽譜）、道具類の寄贈を受けたため、東京文化財研究所の高桑いづみ氏を中心に資料調査をおこなうとともに、幸流小鼓方の成田達志氏の協力も得、約100年ぶりに小鼓胴の名品「錠図蓍梨（じょうずへたなし）」の音色を聞く公開セミナーをおこなった。高桑氏を中心とする研究チームでは、現存する鼓の譜としては最も古い資料の一つである『慶長十二年二見忠隆奥書戦国期囃子伝書』を解読する共同研究もおこなった。成果の一部として、能楽学会の学会誌『能と狂言』14号に、高桑いづみ「地拍子の古態一早歌からの継承」が掲載されている。平成27年度に和歌山市との共催でおこなった「紀州獅子」の復元上演は、和歌山城博物館リニューアル記念事業と本拠点の復元研究プロジェクトの共催。江戸時代初期に紀州藩で工夫された「紀州獅子」の復元上演をめざし、能楽各家に残る演出資料の調査・解読を進め、能楽師の全面的な協力を得て上演・収録した。収録映像は和歌山城博物館にて一般に公開されているほか、NHKのEテレでも放映され、広く紹介された。江戸初期に紀州獅子が作られた経緯や資料解読の過程については宮本圭造・山中玲子がそれぞれまとめ『能楽研究』に掲載している。

伝統芸能や古典演劇の復元は国際的な比較研究にもふさわしいテーマである。平成27年10月には日本演劇学会と共催の研究集会「古典劇の現代上演」を開催し、シンポジウム「古典演劇・伝統演劇の復元的上演はどこまで可能か」での討議、バロック演劇の演出家・振付師のジー

クリット・トホフト氏による長年の実践を踏まえた講演（英語）等を組み合わせて多方面から検討した。

②跡見学園女子大学の横山太郎准教授を中心としたグループによる公募型研究（平成26～27年度）において、文化人類学、メディア研究、伝統芸能、スポーツなど多様なジャンルの研究者や実演者が、わざの継承のありかた、わざを記録するメディア等をめぐる討議を重ねた。この成果を踏まえ平成28年度からは、能楽の技芸伝承の現場に携わる演者やスポーツにおける動作分析の研究者などを交え、書き留められた「付」が能習得の実践の場においてどのような意味を持ちうるのかを「言葉」と「わざ」という観点から問い直す共同研究を実施した。成果はセミナー「以心伝心・以身伝身―「ワザを伝えるワザ」とは何か？―」（平成30年3月。参加者150名）で発表するとともに、「能付資料の世界」（芳名帳記載の入場者数158名）と題する展示を開催した。このほか、建築学や音声情報学の研究者との協同により、幕末の弘化年間に江戸筋違橋でおこなわれた「弘化勸進能」の上演空間のCGによる復元や、コンピュータを用いた謡の旋律表記についての研究を進めた。それぞれの成果は日本建築学会、IARA (International Academy, Research, and Industry Association) で発表している。

③大阪芸術大学の中川志信教授（ロボットデザイン）をリーダーとし、ロボット工学、音響学、VR、アニメ、能楽等、多領域の研究者・実演者による学際研究がおこなわれた。科研費基盤Aで進めた文楽ロボットについては、顔の造型に能面のわざや美学を活かすための研究（成果である文楽ロボットは大阪の「光のルネサンス2017」にてデモ展示）に限られていたが、平成29年度からは新たに「課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業（領域開拓）」の一つとして、能に特化した学際研究を開始した。能独特の所作・舞台空間や音楽との関係等によって観客に錯覚を起こさせ大きな効果を生む仕組みを解明し、新しい環境型ロボットの実現を目指している。一方、ロンドンで開催された「Noh Reimagined 2018」にも本拠点から2名が参加し、脳科学、神経美学の研究者とともに、夢幻能で描かれる夢やイリュージョンについて多方面から検討した。これらの共同研究によって得られた知見を踏まえ、平成30年11月には、医療と芸能の結びつきを考える研究プロジェクトとしてシンポジウム「哲学・医学・能―よく生きるためのまなびとあそび―」を開催する。

3) 国際共同研究による方法論の共有と成果の発信は、英語版の能楽全書へ向けての作業をとおして確実に進展している。従来から深い関わりのあった米国の能楽研究者に加え、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、チェコ、シンガポールの研究者と研究・執筆分野ごとにチームを作り共同研究を進め、平成29年には成果の一部をEAJS大会（リスボン）での2つのパネルThe world of Noh: three aspects of its socioeconomic structure、Noh Texts as a Nexus: Their Multilayered Compositions and Beyond で発表した。また、コンテンポラリーダンスや京劇の研究者との共同討議（平成25年イギリス）、キリシタン文献の解読（平成25～27年）を通しての能楽史再検討などにより、新しい能楽研究の視点も生まれている。こうしたつながりをより積極的に活かすため、平成29年11月には、スタンフォード大学、京都市立芸術大学、中世日本研究所、京都産業大学、東京文化財研究所、法政大学情報科学部、能楽研究所が参加し、日本伝統芸能研究コンソーシアム（JPARC）設立に向けての研究会議を本拠点にて開催した。

#### 【関連研究者コミュニティや研究分野に与えた影響・貢献】

拠点認定後、能楽研究所では研究所所蔵の膨大な能楽資料が広く活用されうる環境を整備するために、上記の複数のデジタルアーカイブを新たに開設したほか、既存の能楽資料デジタルアーカイブのデータ拡充に努めたが、その結果、これらのデジタルアーカイブを活用した多くの研究成果が相次いで公刊されている。すなわち、「金春家旧伝文書デジタルアーカイブ」を利用した中嶋謙昌「作り物図と現代の能」（『能と狂言』16）、「昭和初期能楽映像アーカイブ」を利用した「森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂」（『藝能史研究』216）などがそれである。また、『鴻山文庫蔵能楽資料解題（下）』の完成によって、従来利用されることのなかった近代能楽史の関連資料や能面・舞台関係資料の利用頻度が大幅に増加し、辻慎一郎「新出史料・靖国神社能楽堂の図面史料について」（『楽劇学』23）をはじめ、これらを活用した研究成果が次々に発表されている。

以上のデジタルアーカイブの充実、解題目録の刊行、及び国立能楽堂等における大規模な資料展示、分野横断的な研究会やシンポジウム等によって、従来は能楽研究や中世文学研究、芸能史

研究の関係者にしか知られていなかった貴重資料の存在が、言語学者、書誌学者、美術史の研究者等にも周知され、研究資源として広く活用される環境が整いつつあり、本拠点の活動が研究分野に与えた影響は広範かつすこぶる大きいと言えよう。最近では、デジタルアーカイブを通じて資料の存在を認識した他分野の研究機関や研究者から、研究調査や資料貸出の依頼を受けることも多く、平成30年10月にパリで開催される「京都の宝—琳派300年の創造展」に光悦謡本（上製本）を出展したのも、その一例である。

また、実演の場と結びついた新たな研究の試みは、他分野の研究者との連携や、地方自治体との協力による社会還元など、能楽研究の幅を広げることに繋がった。伝統演劇の復元的上演という問題を歌舞伎、シェイクスピア演劇、バロックオペラの研究者とともに討議したシンポジウムは、国内外の演劇研究者が共通の土俵で考える機会を提供し、今後の研究水準の向上の土台となるものであった。その実践的取組というべき和歌山市との共催による紀州徳川家版「石橋」の復元上演では、研究者と実演者が相互に検討を重ね、学術的な研究に裏付けられた復元が完成し、その成果はNHKでも放送されるなど、多くの反響を呼んだ。また、伝統芸能である能が現代社会で直面しているさまざまな問題や、現代演劇の分野で能楽の技法・作品構造を導入する前衛的な活動を取り上げた連続セミナー「能楽の現在と未来」（成果は能楽研究叢書として刊行）は、能楽の現場にも新しい意識を呼び起こした。能楽の技法の利用、外国人による能楽上演、能楽のグローバル化と伝統等、ここで扱った問題の多くは、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校からの呼掛けで平成31年度より始まる新たな国際共同研究のテーマともなっている。

このほか、英語版能楽全書刊行に向けての共同研究や、海外の学会での研究発表、海外の機関との協力等を通して外国人研究者との連携も強化され、様々な研究分野において、能楽および能楽研究の認知度が上がったと言える。従来は、日本語がとびぬけて堪能な者だけが古典文学である能のテキストにアクセスし日本人研究者と交流を持っていたが、本拠点が海外に向けて扉を開くことで、演劇や舞踊、伝統芸能や身体論、劇場建築等に興味のある学生や研究者が、日本語が不十分でも、能をより広い世界の演劇の中で考えようと、日本に研究にやってくる。写真芸術を専門とするロンドン芸術大学の講師、ミュンヘンの劇場のドラマトゥルク、インドの伝統芸能関係者など、実践に関わる人々にとっての情報センターとしても機能している。こうしたつながりをより積極的に活かすため、立命館大学アート・リサーチセンター、コーネル大学等とともに、日本伝統芸能研究コンソーシアム（JPARC）を設立されたことは、最新の能楽研究の成果を海外に発信するうえでも、海外における能楽研究・日本文化研究の発展をめざすうえでも、大きな一歩である。

さらに、従来まったく能楽とは関係のなかったロボット工学、音響学、脳科学、医療史等の研究分野と能楽研究をつなぐ道筋も生まれている。理化学研究所の入来篤史教授（脳科学）らと共に参加した「Noh Reimagined 2018」（ロンドン）では、脳科学、神経美学の成果と能楽研究の成果を照らし合わせ、夢幻能で描かれる夢やイリュージョンについて、多方面から検討した。大阪芸術大学の中川志信教授をリーダーとする共同研究は、文楽ロボットの頭部デザインに能面研究の成果や能面制作の「わざ」を用いる段階から、より深いところで能の本質を活かす新たな学際共同研究へと深化している。すなわち、能が、独特の所作・舞台空間や音楽との関係によって観客に錯覚を起こさせ大きな効果を生む仕組みを解明し、新しい環境型ロボットの実現を目指している。

## 2. 評価結果

(評価区分)

A : 拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

(評価コメント)

当該拠点は、能楽研究所が長年蓄積してきた能楽に係る研究資料や人的ネットワークを共同研究により活用し、成果を社会に還元するとともに、能楽を国際化することを目的として、拠点活動を概ね順調に行っており、関連コミュニティにも貢献している。

特に、貴重資料のデジタルアーカイブ化を進め、国内外の研究者の利用に供するとともに、総合芸術という視点から、実演家やロボット工学、音響学、脳科学、医療史等の幅広い分野の研究者との共同研究に取り組み、さらに、「英語版能楽全書」刊行に向けた国際共同研究や研究発表等を通じて、能楽の国際的な認知度を高めている。

今後は、刊行物による研究成果の可視化とともに、共同利用・共同研究課題の募集・採択方法の改善等により、拠点活動の一層の充実を図ることが期待される。